



八亀先生のこと

その他のタイトル	Danksagung an Prof. Tokuya Yakame
著者	宇佐美 幸彦
雑誌名	独逸文學
巻	59
ページ	1-2
発行年	2015-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017952

八亀先生のこと

宇佐美幸彦

八亀先生は1973年、関西大学に赴任された。42年間の在職年数は私たちの教室の最長記録ではないだろうか。私は1974年から在職しているので、実に41年間、同僚としてお付き合いしたということになる。私にはこれほど長期にわたって日常的に交流している人は家族以外にはない。40年以上前のことを考えてみると、当然のことながら、我々二人はまだ若かった。ともにまだ20代で、斉藤清先生や道家忠道先生など明治生まれの長老の先生たちと同じ教室に勤めることになったのである。若かった我々も、今や、あの頃の長老の先生方と同じ年齢になったのかと思うと、歳月の流れに感慨無量である。

八亀先生は文学部独逸文学科の「最後の助手」として就職された。昔の助手制度はもうなくなって久しい。今から思い起こしてみるとこの助手制度は研究と教育の拡充という点でたいへんすばらしいものであった。助手のポストは教員の増員を意味していたのである。また当時の助手以外の教員採用は公募制ではなく、教室の人事委員が多大な権限を持っていて学閥的な傾向が多分に見られたが、助手の採用には筆記試験があり、より公平な採用が行われていた。その結果、優秀な人材が集まっていた。しかし残念ながら、増員を伴う助手採用は1970年代までの「高度成長」時代の産物で、その後、文系学部では廃止されてしまった。

助手時代には資料の整理など、いわゆる「雑用」を引き受けられたが、八亀先生は専任講師への昇格以後も、学部や大学の様々な役職をこなしてこられた。とくに大学の中では管理運営の部門である学生主事、就職主事、入試主事など重要な役職をお引き受けになり、黙々とその任務にあたってこられたことは本当に敬服に値する。研究や教育だけでなく管理運営に関してもたいへん有能であると歴代の学部長から評価されていたのである。

八亀先生は「歌のおじさん」として学生たちから慕われてきた。学生

たちとの合宿や、クリスマスパーティーなどの行事のときには、声量あふれる美声でドイツ民謡を披露された。その民謡はドイツの「土の香り」がするもので、学生たちは先生の歌によってドイツ文化の伝統や雰囲気を感じることができたのではないだろうか。八亀先生のサービス精神は常に発展を遂げ、初期はカセットテープに録音した曲をお使いになり、その後はCDとなり、最近では自ら手回しオルガンの演奏をされるまでにいたった。ドイツの観光地などで見られる手回しオルガンを私費で購入され、ドイツ学専修の学生が集まる行事のときだけではなく、ときどき学生食堂の前で昼休みにオルガン演奏をされていたそうで、このレベルまでになると単に「名物教授」という名称ではなく、「ドイツ民謡大使」というような称号がふさわしいのではないかと思われる。

いつも文学青年のような雰囲気を持っておられる八亀先生は研究面でもこだわりを持っておられるように見受けられた。主にシュトゥルム・ウント・ドラング時代のヤーコプ・ミヒャエル・ラインホルト・レンツについての研究をされていたが、先生はレンツの著作を読むという机上の研究だけではなく、レンツの住んだ場所を実際に訪ねて歩かれ、どのような作家人生であったのかをくわしく調査された。フランス語も堪能な八亀先生はストラスブールやヴァルダースバッハを訪ね、オーベルリールとの交流についての資料を収集され、またレンツが暮らしたリーガ（ラトヴィア）にも行かれ、レンツの父親や交友関係について調べられた。文学者が暮らし、活動した現場を観察し、その地で大切にされている資料館などで関連の資料を集めるという、実際的な研究に八亀先生はこだわっておられたと思い、私も大いに見習わなくてはならないと肝に銘じた。ついでに述べると、八亀先生はこのリーガの町の写真集を私のためにわざわざ土産として買って来てくださった。私はこの町と深いかかわりのあるヘルダーに関心を持っていたので、たいへん感謝して受け取り、大切に保管している。「永遠の文学青年」としての八亀先生のご健勝をお祈りする。